

聖霊降臨節第12主日 説教 「仲良きことは美しきかな」 要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021年8月8日
マタイによる福音書5:17~26

一昨日には広島原爆忌、そして、明日は長崎原爆忌と、敗戦直前にあった悲惨な出来事を覚えて、私たちは今年も礼拝を献げるものでありますが、その私たちがこの朝聞いている御言葉がマタイによる福音書5:17以下の御言葉です。そして、そこで思うことは悲惨な体験の共有が必ずしも人と人とを結びつけるものではないということです。そして、それについては御言葉が語るだけでなく、祖父母よりよく聞かされたものでもありました。ただ、すべての人がそうであったわけではありません。その日生きること、精一杯であったとき、たった一杯の食べ物を分け合ったということもまた事実としてあるからです。ですから、世の中捨てたもんじゃないのは確かなことです。けれども、その一方で、世の中が世知辛いものであるということも確かなことです。そして、それは、御言葉が語るように、極限状況だからということではありません。私たちの今この時の足下に置かれているものであり、何かを切っ掛けに人と人とは互いに背を向け合うことがあるからです。ただ、だからこそ、私たちは互いを理解し、関係性が破綻しないように努めねばなりません。武者小路実篤が、晩年、「仲良きことは美しきかな」と色紙に好んで書いたのはそれゆえのことでもありました。

ところで、仲がいいというのはどういうことなのでしょう。それは、必ずしも諍いがいいことではありません。諍いやぶつかり合い、せめぎ合いがあっても、それでも関係性に破れが生じないこと、それが「仲が良い」ということだと思います。まただから、喧嘩するほど仲がいい、という言葉があるのでしょうか。では、ぶつかり合ったとして、どうして関係性が損なわれないのか、一つには、お互いを良く理解し合っているということです。もう一つは、関係性を破綻させないとの共通認識があるということです。収まるところに収まるのはそれゆえのことでもありますが、では、そのために何が必要なのか、それは、互いに嘘がない、偽りがないということです。ただし、だから好きにもの言いいいということではありません。そこに

は、大人としてのたしなみが求められます。ですから、私たちの秩序だった礼拝は大人であることの一つの証しでもあります。そして、この日、大人と呼ばれているその私たちが聞いているものがこの御言葉でもあるのです。

ただ、だからこそ、そこでまた思うのです。私たちと深い関わりを持つ神様に、私たちは本当に嘘偽りなく毎日を過ごしているのでしょうか。また、イエス様に対してはどうでしょうか。私たちは、神様とイエス様に「あなたのことを信じています」と日々言葉にしているわけですが、その言葉に嘘偽りはないのでしょうか。では、もし嘘偽りがあるとしたら、それはどうしてなのでしょう。この日の御言葉の厳しさはそんな私たちに対し投げかけるものでもあります。それゆえ、牧師として私が思ったことは、この御言葉をどのように聞いていけばいいのかということでもありました。それは、19節に「これらのもっとも小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる」とあるからです。しかし、小さいと言われることはあまりに気になるところではありません。気になるところは、イエス様が仰る小ささが22節、23節で言われていることです。そこではこう言われています。「しかし、私は言うておく。兄弟に腹を立てる者は誰でも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』という者は、火の地獄に投げ込まれる」と。

ここで「ばか」と言われていることは「空虚な奴」ということです。つまり、「中身がなく、空っぽである」ということです。そして、「愚か者」とは、「神なき者」ということです。そこで、私たちが時折使う「不信仰」という言葉を思い出すのですが、ですから、私たちが返す刀で切られないためにも、何を持ってそれを口にしていくかは、よくよく自らを振り返る必要があるように思います。ただ、ガラテヤの信徒への手紙の中で、使徒パウロは「ああもの分かりの悪いガラテヤの人たち」と言っているのです。口語訳聖書、新共同訳聖書では、多少二

ユアンスを和らげる試みがなされてい
ますが、けれども、文語訳聖書では「愚か
なるかな、ガラテヤ人」と直接的な表現
がなされています。ですから。ある先生
曰く、パウロのこの言葉は、「お前た
ち、馬鹿か」と訳せるもので、相当強い
言葉でもあるそうです。それゆえ、パウ
ロのこの言葉遣いはどうなのか、とも思
うのですが、ただ、ここでのイエス様
のお言葉については、誰が何を言ったか言
わなかったかというところに意味がある
わけではありません。なぜなら、このイ
エス様の言葉は、言った言わないの類い
のものではなく、この時の私たちに語り
かけられているものだからです。従っ
て、地獄の炎、ゲヘナの火に真っ先に曝
されるのは私たち牧師でもあるのでしょ
う。なぜなら、預言者を気取ってそのよ
うなことを口にすることがあるからで
す。ですから、その先生はこうも仰って
おりました。マタイ 18 章には「「わた
しを信じるこれらの小さな者の一人をつ
まずかせる者は、大きな石臼を首に懸け
られて、深い海に沈められる方がましで
ある。」とあるのですが、それゆえ、
「首に石臼をかけているのが牧師とい
うものです」と、こう仰ってもおまし
た。ですから、ここでイエス様がこのよ
うに厳しいことを仰るのは主にある兄弟
姉妹との関係性を、イエス様がそれだけ
大切にしているからでもあります。そ
れゆえ、そこに嘘偽りはないのか、とい
うことが問われることになるのです。

ところで、私たちが兄弟姉妹に向かっ
て、「ばか」、「愚か者」と口にすると
きはどのようなときなのでしょう。それ
は、関係性に綻びが生じたときです。
そして、そのようなとき、教会の中で時
折聞く言葉が「神様とイエス様だけを見
ていればいい。神様とイエス様とだけし
っかり繋がってればいい」というこの
言葉です。そして、私たちがそう思うこ
とは一見すると正しいようにも思いま
す。それは、肉の思いを捨てて神様の御
心に従うことを前面に押し出すもので
あるからです。けれども、私たちはそう
考えても、イエス様はそうは考えてはい
ない、それがこの日の御言葉の中で語ら
れていることです。しかも、イエス様は
それをかなり厳しい口調で語っている、
それは、十字架の出来事が示すように、
神様の御心に徹底して生きたのがイエ
ス様でもあるからです。それゆえ、私
たちがこうしてイエス様を信じている以上、
イエス様が仰るように、律法を守り、そ

れを徹底して行うことが私たちの務めと
なるのです。ですから、そこで私たちに
求められることは、言った言わないの類
いではありません。私たちに守るべき
ものがあるということです。そして、先
週、そのことを学んだのが私たちでもあ
りました。

イエス様が私たちのことを「地の塩、
世の光」と断言するのは、この「地の
塩、世の光」と言われていることが「な
ろうとすること」でもなく、また、そう
「あらねばならないもの」でもないから
です。従って、ここに記されていること
は、私たちのあり方、生き様そのもので
あり、私たちが何を大切に毎日を生きて
いるか、ここで語られていることはそう
いうものだということです。それゆえ、
この「守るものがある」ということは、
それが私たちの生き方の軸であり、中心
となるということです。ですから、そう
考えれば、イエス様が私たちにこのよ
うに厳しいことを仰るのはよく分かりま
す。なぜなら、そこから外れることは、
私たちが私たちではなくなることであ
り、イエス様にとってそれは到底耐えら
れないことでもあるからです。それゆ
え、イエス様がここで仰る厳しさは、い
わば親心に等しいものだとも言えるので
しょう。つまり、イエス様と私たちとが
それだけ近いから、このイエス様と私
たちとの近さがイエス様をしてここでこ
のように言わしめているということです。
ただし、この近さを私たちは誤解しては
なりません。イエス様と私たちとの近
さは、私たちから見て遠いか近いかとい
うことではないからです。

「地の塩、世の光」ということが動か
しようもないものであるように、近さと
はただ近いということであり、それ以上
でもなければそれ以下でもないとい
うことです。そして、すべてこの前提に立
って語られているものがイエス様の言葉
であり、特に、この前提を前面に押し出
しているのが山上の説教でもあるのです。
ところが、私たちはどうか。この前提を
なかなか飲み込めずにいる、いや、飲
み込むことができないのではなく、一
端飲み込んだものを吐き出してしま
った、それがこの御言葉に聞いている
私たちではないのでしょうか。ですから、
ここでのイエス様のお言葉を私たちが
厳しいと感じるのはそういう後ろ暗
さがあるからで、そして、それは、
かつて幼子であった私たちは、
イエス様の仰ることを喜んで飲
み込んだことを覚えているからです。け

れども、それにしてもどうして私たちは一旦飲み込んだものを吐き出してしまったのか、その経緯について御言葉は次のように言っています。

マタイ11章には「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のようなものにお示しになりました。そうです。父よ、これは御心に適うこととあり、また、皆さんよくご存じの第1コリント書の愛の賛歌では「幼子だったとき、私は幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを捨てた」とあります。従って、御言葉がこう語るように、イエス様の仰ることを私たちが素直に受け止めることができないのは、私たちが成人したからでもあります。では、「大人になる」ということはどういうことなのでしょう。それは、この日の御言葉に聞いていくなら、大人になるということとは「守るべきものがある」ということです。つまり、「大人」になるということとは訳知り顔でいることでもなく、また、偉ぶったり、利口ぶったりすることでもないということです。大人であることが「守るべきものがある」ということであるように、それは、軸が定まっているということでもあるからです。けれども、それは、だから、ぶれない、揺らがないということではありません。

マルコの9:14以下に、我が子が汚れた霊に取り憑かれた父親が、癒やしを求めイエス様のところにやって来たという話があります。そこでその父親がイエス様に言ったことが「おできになるなら、私どもを憐れんでください」というものでした。そして、この言葉を受けてイエス様は何と仰ったのか。それは「『できれば』』というか。信じる者には何でもできる」というこの一言であります。すると、その父親はなんと仰ったのか。そこで父親が口にしたことが「信じます。信仰のない私を助けてください」ということでした。文語訳聖書の「我信ず、信仰なき我を助けたまえ」ということでもあります。けれども、このことはつまり、揺るぎない確信の上に立っているものが私たちの信仰ではなく、揺らぎながら、ぶれながらイエス様に「信仰なき我を助けたまえ」と告白すること、この経験の上に成り立っているものが私たちの信仰であるということです。ですから、私たちの信仰が養われ、育まれ、強められるのは、私たち自身がその弱さを克服し、過去のものとするのができたからではありません。

せん。信仰的成長は弱さを誤魔化さず、自分自身のありのままをイエス様に受け止めていただいてこそのものであり、このことはまた、イエス様に十字架という「守るべきもの」があったように、人としての弱さを抱きしめ、神様の御心に聞いてこそのものであるのです。ですから、「大人」とは、自分自身の弱さを弱さとして受け入れることのできる者であり、まただから、この弱さに働きかける「守るべきもの」を「大人」は必要としているということです。従って、イエス様を前にした自分の無様な姿、神様の御前にある見苦しさ、そういう自分から目をそらさず、それ自体を神様とイエス様に差し出し、その上で御心に従うこと、それが大人であるということです。

しかし、それだけにまた、そういう意味では非常に面倒臭いものが私たちの信仰でもあるのでしょ。それは他人がなかなか口にしないことを遠慮なく私たちに求めてくるからです。けれども、それを語るの誰なのか。他でもない、私たちの近くにあるイエス様が共にある私たちに向かって語るのです。ところが、それをこうして聞いている私たちはどうなのかということなんとも心許ないものもあるのです。イエス様がここで仰っていることにことごとく反しているのが私たちであり、まただから、成人した私たちは、この無様さ、見苦しさに耐えきれず、弱さを誤魔化そうとしてしまうのです。まさに、私たちが日常的に「大人」と呼んでいる態度が私たちをしてそのように自分自身を偽らせることになるのです。それゆえ、当然のことではあります。それがイエス様が私たちに求められる「大人になる」ということではありません。ですから、私たちがもしこのままでいいと真剣にそう思っているとしたら、神様に見放され、見捨てられたとしても仕方ありません。まただから、御言葉は預言者を通してこう語るのです。「この民の心は頑なで、私に背く。彼らは背き続ける」と、また、「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」と、つまり、神様の目からすれば、それがまさに大人になろう、なろうとしている私たちの偽らざる姿であるということです。

しかし、そうであるからこそまた、その私たちに向かって、「あなたがたには守るべきものがある」とそう仰っているのが私たちのイエス様でもあるのです。ただ、イエス様が私たちに対して厳しい

言葉を投げかけるのは、その私たちを何か別のものに変えようとしてのことではありません。イエス様からすでに「地の塩、世の光」と呼ばれているのが私たちであるからです。ですから、私たちは別の何かになる必要もなければ、なろうとする必要もありません。求められていることは、このありのままの私たちであり続けることです。まただから、イエス様はそのような私たちのことを幸いであると繰り返し語るのです。ところが、私たちは、この「幸いな自分自身であり続けよ」とのイエス様の言葉に聞くのではなく、イエス様以外のものに心動かされ、ですから、時に、自らの満足、欲望を満たしてくれるものを神のごとく拝み、ひれ伏すことさえ厭わないのはそれゆえのことでもあります。しかも、そのときの私たちは自称「大人」であるがゆえに雄弁です。そうであることの原因をとうとうと述べ、主張さえするのです。特に、ここでイエス様が求めるようなことに対してはなおのことです。「イエス様、そりゃ無理ですぜ。そんなことは誰にだってできっこありませんよ。何なら、それを完璧にできる人を目の前に連れてきてくださいよ」と、そう開き直ることさえするのです。ただ、イエス様に対し面と向かって文句を言うなどなかなかできることではありません。御言葉を自分からなるだけ遠いところに置いて見ないようにするのはそれゆえのことでもあります。けれども、そうであるからこそ、私たちが私たちであり続けるためには、イエス様のように御言葉の内側に我が身を置く必要があるのです。

ただし、我が身を御言葉の内側に置く私たちの共同生活には常に綻びが見え隠れしています。ですから、ここでのイエス様の言葉は、私たちがそういうものであることを教えるものです。けれども、ここで私たちが教えられることは、私たちの共同生活が破綻寸前だということではありません。このままでは破綻するに違いないのたちとイエス様が共にいてくださっているということであり、つまり、ここでのイエス様のお言葉は、イエス様にとっては他人事ではないということです。ですから、ここでイエス様の仰りたいことは、「ぶれて、揺らぐのはもってのほかだ」ということではありません。軸が定まらず、グズグズ言うことの多い私たちであるのは間違いのないのですが、その私たちが軸が定まり、「地の塩、世の光」としての自分自身を取り戻

すことができるのは、私たちと共にあるイエス様が私たちのことをいつも気にかけておられるからです。まただから、そこで私たちははたと気がつかされるのです。その私たちとイエス様とは近い関わりにあることを。ですから、イエス様のお言葉が私たちにとって耳に痛いのは、イエス様との近さを私たちが実際に感じているからでもあるのでしょう。

従って、私たちが忘れてはならないことは、イエス様の声の届くところに自分自身がいるということです。つまり、耳に痛かろうが、厳しいことを言われて気持ちが悪くさげすまうが、このイエス様のお言葉から離れようにも離れられないところにいるのが私たちであるということです。そして、それは、ちょうどイエス様が神様の御言葉から離れることができなかつたように、それが「近い」ということであり、それがイエス様を信じるということであり、それが私たちであるということです。ですから、私たちに「守るべきものがある」のは、そういう意味で私たちが私たちであり続けるために必要なものであり、まただから、イエス様と共にある私たちの日々の暮らしが、後は野となれ山となれということにはならないのです。神の民の一人として私たちが終わりの日までを歩み続けるために手を尽くして下さっているのがイエス様でもあるからです。

ですから、そのためにも私たちは、耳に痛いとか、厳しいとか、できるとかできないとか、そういう自分への拘りを手放さなければなりません。なぜなら、私たちは皆弱いのです。守ろうとしても守れないし、いくら立派なことを言ってもすぐに馬脚を現すものでもあるのです。そういう無様な姿をイエス様の前にさらすしかないのが私たちであるわけですが、けれども、イエス様はその私たちとどこまでも共にいてくださっている、「信仰なき我を救い給え」としか言葉にできない私たちとイエス様はいつまでも共にいてくださっている。だから、私たちは自らを誇るでもなく、また、人を卑下するのでもなく、イエス様と共にあることを知っているがゆえに、いかなる状況に置かれようとも、「地の塩、世の光」として、イエス様の愛を現すこととなるのです。ですから、そういう意味で、イエス様と神様のお言葉に誠実に従う私たちでありたいと思います。祈りましょう。